

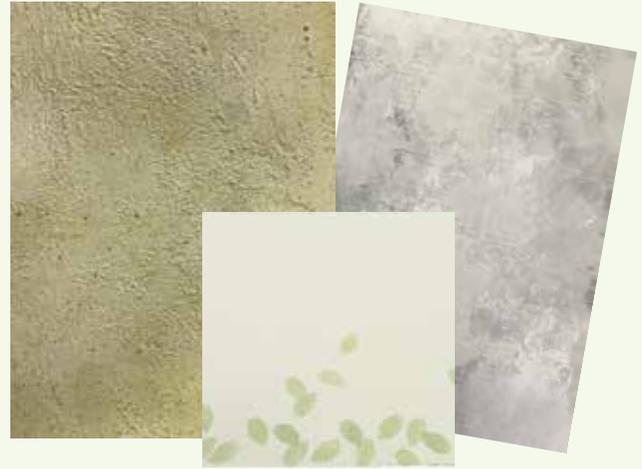
「アレスシックイを用いたテクスチャー表現に関する技法」

2018年7月25日(水)

関西ペイント(株)ペイントギャラリーで行われた
P X I ペイントアカデミー ワークショップ

ヨザン弥江子の 「アレスシックイを用いたテクスチャー表現 に関する技法」

についてレポートいたします。



今回のワークショップは、「P X I ペイントアカデミー」東京版の4回目。シリーズ最後ということで、講師のヨザン弥江子さんから、いろいろなデザインペイントの技法を使って『アレスシックイ』によるテクスチャー表現を学びました。アレスシックイは、関西ペイント一押しの漆喰塗料で、消臭、調湿、抗ウィルスなど漆喰の性能を有しているながら、刷毛やローラーで塗装できます。ヨザンさんも日ごろから愛用されているそうで、一例としてP X I ギャラリーに投稿いただいた「[若井歯科医院ヒーリングアートプロジェクト](#)」について、セミナー内で詳しく紹介してくださいました。



「アレスシックイは少し質感があるので、別の塗料を加えることでより深くいろいろな表現ができます。デザインペイントは、これまでもお話してきた通り、技術も大事ですが作られるもののストーリーを持つことが大事です。目的があるとそこに近づくことができます。今日はどのような仕上がりにするかを考えながらアレスシックイで遊んでいただきたいと思います」とヨザンさん。今回のワークショップでは、ヨザンさんの他に(株)フォーアーツデザインのスタッフ、折戸佑希さん、長孝潔さんにも講師として参加していただき、3つの作品づくりに挑戦しました。

1つ目は、長さんの指導を受けながら、アレスシックイシーラーネオを塗装した石膏ボードに、アレスアートシックイ厚膜型(特別色)に珪砂を入れたものを、コテを使って砂岩風に仕上げていきます。珪砂とは、レンガの目地埋めなどとしてホームセンターでも売られている建築材料です。「砂粒が大きいほどダイナミックな粒感が出るのですが、コテで塗り広げたときに砂を転がした跡が出て人工的な表情になりやすいので、今回は程よい6号を使います」と長さん。アレスシックイ厚膜型100mlに対して小さじ1杯程度の珪砂を入れ、クリーミーになるまでよく混ぜ、ボードに塗っていきます。



「コテは立てるとネタを動かすことができ、寝かすと表面を整えることができます。例えばコテをランダムに滑らせるだけでも模様ができますし、スタンプのようにポンポン押し動かせば、離すときに表面の塗料が引っ張られ、トゲトゲのテクスチャーが生まれます。そのままでは激しすぎるので、上から押さえるなどしてならしを加えます」と、デモンストレーションをしながらコテの使い方を説明する長さん。

「1度で決めようとしなくていい方が気も楽です」というコツも教えていただきながら、皆さん自分の作品作りをスタートさせました。しかし、コテを使うのは今日が初めてという方もおられ、思ったようにネタが伸びなかったり、粒跡がついてしまったり、なかなか苦労されている様子でした。



砂岩風のボードが乾くまで、折戸さん指導の下、2つ目の作品に取り掛かります。ベースにグレーを塗ったボードを使い、アレスシックイのグレーをごく薄く水で伸ばしてコテで塗り、モルタル壁風に仕上げしていきます。

「この作品は全部で3工程行いますが、1、2回目はごく薄くしたアレスシックイを被せ合わせていき、わざとムラな部分をつかってモルタル風を表現します。先の作品では、コテの使い方と表情を出していましたが、2作目は色のコントラストで表情を出します。色で凸凹を表現する感じです」と説明しながら手際よく見本を仕上げていく折戸さん。

先ほどと同様、デモンストレーションを見ているとすんなりできそうでしたが、実際やってみると薄く塗ることが意外に難しく、思ったようにはなかなか表現できません。

「全部きれいに伸ばすと一層重ねただけのベタっとしたものになってしまいます。もし塗り過ぎたと思ったら、早めに塗った箇所に霧吹きをかけてウエスで拭き取り、跡が残らないように馴染ませれば大丈夫です」と、折戸さんから的確なアドバイスがあり、皆さん真剣に取り組まれていました。

「こういう作業で大切なのは、構成とバランスです。一つの壁面を仕上げるとき、どこにどんな風合いを持たせるかというイメージを持つこと。内装の場合、見た目『静かだな』と感じるぐらいがちょうどいいです。サンプルのように小さい面積でつくったとき面白くても、大きい壁面にしてみると強かったりします。例えば前回のワークショップでやったカラーウォッシュをこの後プラスすると、模様がス〜と静かに向こうへ行ってくれます。大人っぽいというか静かな方が、住環境にはやさしくて、気持ちが休まりますし、疲れがとれます」とヨザンさんから貴重なコメントをいただきました。



今回はグレーをベースにモルタル風に仕上げましたが、サーモンピンクを使えばヨーロッパテイストのローマの壁のように、白とグレーを使えば中国の塗り壁のようにも仕上げられるそうです。イメージが広がりますね。



いよいよ最後3つ目の作品は、ヨザンさんの担当です。ボードの上にアレスアートシックイ厚膜型をコテで均等に広げ、その上から幅広の豚バケで繊維のようなテクスチャーを付ける「クシ引き」をしています。厚膜をたくさん乗せれば凸凹感が出てインド綿のような風合いになり、ハケを強く引っ張るとより細かいテクスチャーが生まれるそうです。「盛り上がりのイヤな部分ができて、上から引き直せば修正できます。しかし、私が皆さんに広めたいデザインペイントは、印刷されたクロスのような人工物に見えてはいけなくと思っています。だから少し線がゆがんでも、はみだしても、それが良さになるような表現を貫き通すことが必要です。それこそが手仕事の良さです。今後、AIなどテクノロジーがますます進化しても、私たちしかできないこと、私たちだからできる気持ちや力の入れ方、ちょっと気をゆるめて歪ませてみることもできます。しっかりキレイにできていないからダメというのではなく、バランスが取れていればいいのです。大事なのは、楽しむということです」とヨザンさん。



デザインペイントは、実は作業中に修復がしやすく、アイデアを加えれば基本を超えていろいろアレンジできる場所も大きな魅力です。たとえ線がゆがんでも「失敗」ではなく「個性」と捉え、全体をクリエイティブしていくと、仕上がりは全く異なったものになっていきます。

今回の3作品は、それぞれ一度の工程だけでなく、2回、3回と工程を重ねて最終の作品へ仕上げます。

1作目の砂岩風では、コテで表面に凸凹のテクスチャーを付けた上に、かなり薄めたアレスシックイ（薄黄色）をハケの腹でテクスチャーの表面だけ軽くなでるようにドライブラシをかけ、スパッタをして仕上げます。これにより立体感が出て風合いが増すとともに、使い込んだ壁のような味わいが出てくるそうです。2作目のモルタル風は、同様にアレスシックイ（グレー）を乗せた後、仕上げにホワイトで一番明るいところを決めてハイライトを入れると、より色の奥行が生まれて華やかに仕上がります。最後の3作目、クシ引きの上には、事前に作っておいた型を使って、葉や花びらのステンシルを散らして思い思いのデザインを表現します。

三作品とも皆さん同じ手法でやっているにもかかわらず、仕上がった作品は三者三様。それぞれ風合いが違って、手作業だからこそ生まれるデザインペイントの面白さを改めて実感できました。



今回使用した塗料

1 砂岩風仕上げ

- アレスシックイシーラーネオ（下塗）
- アレスアートシックイ厚膜型（特別色22-90B）
- アレスシックイ淡彩色（薄黄色J22-80F）
※ドライブラシ用
- PXI's: カラーフォーキャスト2018
（African Mud）※スパッタ用

2 モルタル風仕上げ

- PXI's: エssenシャルコレクション
EC45 Aluminium Snow（下地）
- アレスシックイ（グレー、ホワイト）

3 くし引き仕上げ

- アレスアートシックイ厚膜型
- アレスシックイ淡彩色
（37-80D・15-80B）※ステンシル用



ワークショップの締めくくりは、恒例の講評会です。今回作った作品の中から一番のお気に入りを選んで並べ、一人一人感想を述べた後、ヨザンさんからコメントをいただきました。自分が目指したデザインとでき上がった作品との違った点、難しかったところや工夫したところなどを話したり、自分の好み通りカッコよく仕上がったと満足そうな参加者がおられたり…。こうして参加者の作品と自分のものを見比べられるのもワークショップならではの、非常に刺激となり、また新たな作品を作ってみたいという意欲へもつながります。

最後に修了書をお渡しして、今回のワークショップも無事終了。たくさんの体験を通じてデザインペイントの楽しさと可能性を感じていただけたと思います。



ヨザン弥江子さんのワークショップは、今回でシリーズが終了しました。しかし、もっと多くの方にデザインペイントを知っていただき、ペイント文化を広めていくために、今後もまた新たなワークショップなどを開催していく予定です。改めてインフォメーションさせていただきますので、どうぞご期待ください。